音楽のよろこび

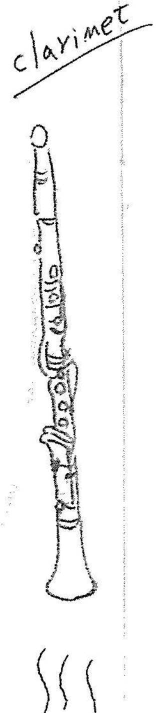
京響メンバーによる大人の音楽教室
2021. 4. 26 No.1 (2017, No.1から33号目)
発行、文責 担当事務局 田中正泰

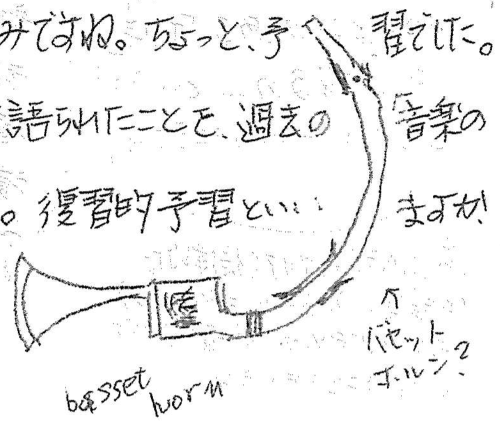
♪ 春の訪れとともに、2021年度の京響メンバーによる大人の音楽教室・開講です。今年度は、コロナ禍の中ではありますが、感染を防ぐ最大限の手だてをとり、「生」演奏と、お話を楽しむスタイルとしました。「芸術を享受することは、人間にとって不可欠」と言ったドイツの政治家が一時話題になりましたが、言わば、これは、あたり前の事、芸術家の活動を支え、そこから私達が、音楽文化・芸術とともにある生活を工夫して創り出し、人間らしい心豊かな日々となる事、その一つとして本講座もある…と考えています。

♪ さて、今日は、**クラリネット**……深く、やわらかく、あたたかい音色大好きな楽器!! 若い時ブラスバンドでやってた!という方もおられるのでは…。筒井祥夫さん、京響クラリネット副首席奏者。過去3回、本講座に来ていただき、今回は4回目です。そして、共演していただくのは、鈴木祐子さん(クラリネット・バセットホルン)、和泉夏子さん(ピアノ)の御二人です。ところで、今回使用される「バセットホルン」って、どんな楽器?という方もおられるかも…。

調べて見ますと、クラリネット属の木管楽器で1770年頃バイエルンで考案され、中・低音域は、やわらかで美しい音色をもち、モーツァルトに愛好された(音楽中辞典、音楽之友社刊)と記されています。とても楽しみですね。ちょっと、予習でした。

さて、これまでに筒井さんが、本講座で語られたことを、過去の「音楽のよろこび」からコピーして、ウラに再掲しました。復習的予習といいますか! 今回の講座が、より楽しく聴けるかも…と思っています。



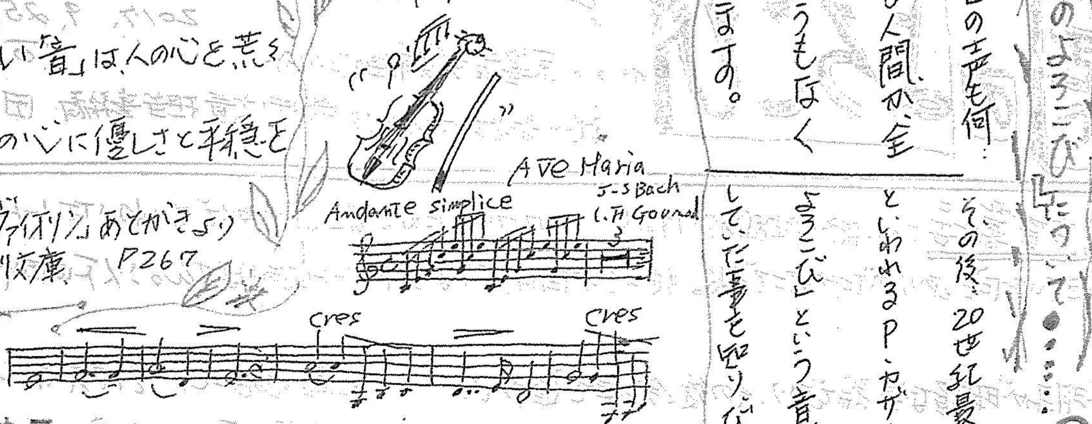


この欄は音楽に関わるステキな言葉、小説、詩、評論などから紹介していきます。

聖書に「神は言葉なり」という節があります。言葉は「音」なのです。荒々しい汚い「音」は、人の心を荒々しく、汚い「音」は人の心を荒々しく汚くします。優しく澄んだ「音」は、人の心に優しさと平穏を届けます。……

香川宜子(よしこ)作「アヴェマリアのヴァイオリン」あとがきより
角川文庫 P267

皆様が、これはどう…」といった「言葉」があれば、田中に教えて下さい。



～事務局から～

本講座、今年度は、2017年度に新設されてより、5年目となります。音楽を愛する熱心な受講生の皆様のおかげで、今日がある事に事務局として感謝いたします。昨年度、コロナ禍の中、講座を閉じるキキもあった訳ですが、こんな中であるからこそ…そして、京響、金本さんの「DVDをつくりましょう!!」の一言にはげまされ、講座を開講し続けたのでした。……今年度も心よく講師を引きうけていただいた京響の演奏家の皆様、ありがとうございます。そして受講生の皆様が楽しく音楽の世界に身をゆだねていただける様、私達は心をくだいてまいります。

この講座の担当事務局は、田中、佐藤、河野、岡村、滝本、中村の6名です。必要に応じ、更に応援メンバーが入る事もありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

毎回の講座に発行してきました小紙も、2017年度の一号から今号で33号。ごらんのように時代おくれの「手書き」……「ナントカナランノカ!!」の声も何度か、でも書いている人間が全くのアナログ、どうしようもなく今日に到っております。

「音楽のよろこび」って……

実は、3号までは「音楽はステキだ」だったのです。でも、みなさんのアンケートを読み込み、「よろこび」がより妥当と思い、かえました。

その後、20世紀最大のチェリストといわれるP・カザルスが「音楽のよろこび」という音楽雑誌を出していた事を知りびっくり……。

スペイン語のブルイシスン(喜こび)」を、いただこうかとも思いましたが、カザルスの働く人々にこそ一級の音楽をとの思いと行動(労音の組織など)に共感しつつ、私達は、私達なりに講座が楽しく歩めたらとの思いで「ステキ」から「よろこび」にして良かったのではと思い、今日まで来たのです。

皆様からの投稿期待します。お感じになったこと、御意見、音楽エッセイーなんでも、皆様の交流、コミュニケーションの場に使って下さい。どうぞよろしく!!

次回は……
6月28日(月)
時間は今日と同じ流れです。
ホルンです。
Horn

小椋順二さん
♪～ やわらかく 豊かなひびき…

■「復習」で「予習」？
2017年に筒井さんに来ていただいた時の
田中の印象メモみたいなもの。…
今回の参考までに…

音楽のよろこび

…京響音楽講座のたのしみ　2017．9．25（月）　NO．4
秋…音楽シーズン到来!!　発行・文責 担当事務局 田中正恭

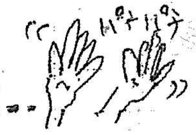
筒井祥夫（よしお）さん（京響）、古賀喜比古（よしひこ）さん（大阪市音楽団）のクラリネット、いかがでしたか。すこし、カタメでていねいなノートを準備して私たちに、かみくだいて教えていただきありがたかったですね。従って今回は、下手な田中のノートはありません。以下は田中の印象メモみたいなものです。

- 歴史からはじまり、発明者が明確な楽器であり、その後今日まで進歩してきている楽器であること。そしてオーボエは円すい形であるが、クラリネットは、一定の管体、一直線の楽器、閉管してる、オーケストラ中唯一の楽器、長さはオーボエと同じくらいだがオーボエより1オクターブ低いという特質、低音から高音まで音域はひろい。
- B管（ベー管）、B♭の音、つまり「シ」の半音低い音からの音階（変ロ調、♭が二つの調ですね）の運指が一番ラクなクラリネット。
- A管（アー管）Aの音、つまり「ラ」の音からの音階（イ調、♯が3つの調ですね）の運指が一番ラクなクラリネット、そしてその他の調のものがあること、例、C管とか… Sクラという高い音域のもの、そしてバスクラリネット、更に低いコントラバスクラリネット（吹くとまわりが振動するそうな…）そして、グリッサンド奏法もOK（ラプソディーインブルーの冒頭に有名なグリッサンドありますね）
- フルート等とちがい、1オクターブ上の音は、運指がちがい、1オクターブ＋完全5度上が、殆ど同じの運指になるとか…
- 「指づかい」は基本の音が出るだけであり、補助であり、同じ指づかいでいくつもの音が出る（出せる）のであり、口の中で、音のイメージをもって、反復練習していく中で、ねらう音を出す。…音をセレクトしていく感覚でやっていくとか…（ヒャームツカシー…）

※質問にも、たくさん、ていねいに答えていただきました。中学校のブラスバンドからお二人のクラリネット人生が始まったこと、肺活量よりも効率よく、リードを扱うことや、息のコントロールが大切とか、（京響には二人の女性クラリネット奏者が…）60代からでもできる？には「※○△…」とか、グラナディラというアフリカ・タンザニア産の木で今はつくられているとか… 筒井さんのは完全に木ですが古賀さんのは、その木を粉にしてグラスファイバーで固めた楽器で、ブラスバンドは吹く場所を選ばない（野外でもどこでも…）ので、その方がいいとか、値段は同じだとか…。古賀さんのは落とすと割れやすいが、真夏でも吹けるとか…。会場によるクラリネットの吹き方の有様とか、距離感の意識とか…、ノート以外にも、皆様の熱心な質問の山で、とても勉強になり、楽しかったですね。会場でも大阪市音楽団の民営化の事をすこしふれていただき、全国に行けるようになってみなさんお元気ときき、ちょっとホッとしましたね。終了後、控室でよりその事にふれて、「民営化」の嵐の中で、団員がやめていく事もあったのです、でもその中で、古賀さんの様な優れた音楽家が新たにメンバーとして加わるという事も生まれたのです」とも聞かせていただきました。元々欧米に比べ、国や公からの支えが、お話にならないくらいの貧弱な文化行政＆予算の我国での芸術家の処遇ですが、自からの貧弱な文化観を恥ずかしげもなく誇り、文化芸術を切りすてる輩の攻撃を逆手にとり、一級の音楽を全国展開する大阪市音楽団の皆さんを今後も、京響と同じく、私達もしっかり見守っていきたいと思ったのでした。クラリネットの深く、明るく、多様な音色にシビれました。ありがとうございました。

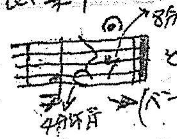
■ 本当は、講座が一回終わる毎に、皆様にアンケートを書いていただきたい。2019年度までは、そうしていたのです…。でも今はコロナの時代、残念ですが、今しばらくは、行いません。次回の講座の時にでも、事務局に伝えたい事、御意見等ございましたら、メモなり、おわたし下さい、よろしく…。

拍手考…



「はく手について、すこし、かんがえたこと。…」 by M. Tanaka

クラシック音楽のコンサート等で、演奏が終わり、客席から盛大な拍手、聴衆と演奏家双方にとって、とても幸福な時間ですね。ところが「良かった!!」と思って拍手したら、曲の最後ではなく、…まわりがすこし変なふんいきに…」とか、もっと率直に「いつ拍手したら、イイの？」等言われる事が、ママ、あります。　田中なりに結論から申し上げれば、一つの曲が終了した後、演奏家は、必ず、「終わりました、どうでしたか」といった表情や、しぐさをされます。すわっての演奏した場合は立ち上がって、同様にされます。これを待てばいいのだと思います。クラシック音楽には、一楽章だけのもの、そして二つ以上の楽章で一曲といったものが、たくさんありますね、四月に演奏されたモーツァルトのアイネクライネナハトムジークは四楽章ありました。ですから一楽章きいて、よかった!!と思ったら、心の中で拍手、そして次の楽章へ期待し、終楽章まで聴きとおします。終わって、その曲の余韻を楽しみ、一呼吸、演奏者を見て、その時の気持を拍手であらわせばいいのではないでしょうか。また曲によっては、一つの楽章から次の楽章へは、楽譜にattacca（アタッカ、伊語）と書いてあるものがあり、これは「切れめなく」という意味で、連続して演奏したり、ほんのちょっと間をおいて即、次の楽章へ行く場合があるのです。ここで拍手が入ると演奏家の音楽的緊張や集中にユラギが生じるかもしれません。また、曲の最後が



と休符がある場合もあるのです。（ベートーヴェン、ヴァイオリンソナタNo5のさいご）この曲には休符に更に𝄐（フェルマータ）があるのです。「のばす」という印、速度記号ですね。おわかりの様にこの曲は、休符も含めて一曲なのです。

音楽は、音が鳴っている時と静寂という要素があって成り立ちます。これらもふまえると、先に申し上げた様に鑑賞し、演奏者とともに終了を確認し、心からの拍手を送る…そこに演奏者と聴衆の豊かなコミュニケーションの時間と空間がうまれると考えるのですが、いかがでしょう……

2017．9．25に出したものです

「クラシック初心者」です、と言われる方から、時々聞かれることがある「拍手」は、どうするの…ということへの、一つの考えです。

■ 尚、オペラでは、アリア（旋律的な独唱等…）の終わったあと拍手が来ることがあり、その間、音楽がストップすることもあります。